

及之部若門院殊儀... 所引堂... 其類... 兼各... 後有... 然其... 遂以... 車並... 實... 實...

文安田樂能記

實意大僧正

伏見殿... 當今乃親親王... 實意...

實意... 後花園... 安元...

安元... 住心院... 安元...

晚福... 本座田樂... 菊行子也... 出...

返飛... 入奥... 此の儀...

有之者... 被悔...

此被... 沙汰...

省言... 成申...

文安三年三月十七日

親王御方周令成給御同車湯手銅土人番頭土人
 入御之時分實意出門前邊湯手土人虎素之屋土人
 被下自御車之内有御會秋宮平伏于地湯車公卿
 座より寄

供奉殿土人

隆富朝臣

重演朝臣

永親

德政仲

有俊朝臣

伊成朝臣

經秀

冬會

三條

按察大納言

前大納言入道

侍從三位

公卿朝臣

季春朝臣

月

帥大納言

兵部卿

教季朝臣

雅親朝臣

地下

定直

感賞

御兼任

明感法眼

光御之後天氣使晴跡重々由被御時大日宣旨
 御被身被下御被二首被古到

系代の音とて平此の後のあはまの心とてさう
まう地を山よりまうとてさう
実意の伯母の胎也いふま由一給也一傳也
院号任心流るまうとてさう
まうり當時の嘉名は代は飛鏡何事か
謹贈卷中入

系代とてさう
安名貴竹たはら
雖有正忠申上
三御益進上
次執供御
被之時
刻次御樂
始

調子平調

菊藏樂

五帝樂急

太平樂急

御所作

御琵琶

親王御方

御琴

田辻大納言入道

菊亭宰相御教

有後胡卡

季春

親種法眼

聖護院
寺門御坊
法眼非道
身位執心
行に如く

地下

卿好

景勝

言秋

卷林

季成

次田樂 先中門口

ヒンカウ 菊河彌 笛 玉河蘇 着花笠者 足秋ヲハシ

次立邊

飯阿 也河 龍河 金河也

揚万葉歌 翻彼事良久

次刀玉

玉河今河 西人勅之 生役者之儀ハ也

次能藝

一番 新田北志春ん敲かう門乃能

二番 女沙汰の能

三番 小野物多乃ハ能

四番 大ハ乃能

五番 乃乃ハ能

六番 書寫ハ能

七番 法然上人の能

八番 小登小町乃能

九番 海風志能

十番 子實乃能

是日降氷夕湯ありか多梅く日没をこし胡と
くて是賤群集之人每能ある哉多うの事

之矣詔只驚耳目云云正東新座盤昌本座更之
 之今又幸座吉よ海して奥座并福有九能齋容儀
 越り常中り此福有九年少之時自他よ立入此門室
 度先世之宿縁歎私宅に帰るると悲し門葉よ地
 遂するると勇よ心操の趣絶常為り釋門其義理
 兼り是を疎もとん然同同宿よ小及敷益年
 為りしと幸中七歳より入夜之後有沙前之旨
 沙堂既之次中云何と難單以御抄沙堂
 被下親王御方同前沙扇亦出よ被下此折紙
 心庭田中将給之

此朝長と禁裏之
 沙亦殿重人也

自親王御方之法

馬青御太刀也卿上雲客或脱將衣安投出密
 西相衣別の上折紙僧中被作之氣袈裟衣
 同投之曉天御座鋪終還御之時云々今日
 之儀于歲之一遇とん此年おれへく本座
 能者其嗜祚少被出思召く由云作下为彼等
 生かく名皇神意く加被るり物又銀清建
 益同臺同益為祝恙として拜領不存是師祝
 重之實此一入あり是御無為祝恙歡喜于
 子弟く

翌朝冬御禮

進上

折紙

御繪

和尙

高檀紙十帖

進上 親王御方

御扇十本

御料紙十帖

御太刀

御馬

若王子御方後作折紙色上

岩坊

村秀法眼 御馬 御太刀 色上

田樂之惣人数

福若磨

菊子丸

竈竈丸

藤雲丸

葉河

飯門

似河

愛河

林河

竈河

玉河

金河

松河

寂河

分河

一河

幸河

種河

同十八日

若君極

奉成

門跡極如意寺殿河渡御昨日之竈屋以外難
忘法より清切雅く申事也 田樂沙目物之御
定一有くまれ存忠儀以申也 午之御

尅光御

御輿

袖白上扇

御力若八人御太刀

八千人左右小列行進前二双居たる見物所皆

追拂早御輿寄公卿座後唐中門より御

供申法橋源登中納言寺主豪祝也村秀法眼

冬若君此亭若堂

供奉女中

上扇御方

沙乳の人

音子

華室大納言息女

岩坊内西向

中扇新造岩坊内

御蓋三軒二及田樂始々中門口以下如前

一番 水くみ人

二番 水くみ人

三番 水くみ人

四番 水くみ人

五番 水くみ人

六番 水くみ人

七番 水くみ人

八番 水くみ人

限日之書能終

今日見物之款若日に起るとて遊二小女奴若

人未枝より水内是若人々獲所依傳也

庭之独已及於云不舞音曲沛見聞後為
九皮法度之徹作之自餘人在廣庭獨來
在之著して居るは詞紙のひのひ多春
能之形比凡情亦多之與相吉相吏之友
三書松阿勒之於事周備して門跡極折紙
被下之若公極沛服給之如中皆之被授之
實意為裝沙衣授事の明の及夜半還法
友日之儀分が誰分して大僧等之其高欽院
之同女一日福有凡被召伏見殿実念同未
上内外之諸卿奏惟歌鞠之御遊路日清欽ハ

短冊不及紅搦被重計也見只一人未之有舞
多其以為計念欣但聲は揚進人酒座所
小秘く袖を飄と及法人驚目采于時沛
服被下北沛積之園母后の沛服有り也
後又不衣及也悪之可及舞之友作上る於
御前若用は帥大納言古後を以殿と前代
未之之面目ありは沛小袖とかいともて是也
西近江の御乃あり之業未す心教たもらぬ多如
多くはふらぬともて性く得進する事
河邊之詞紙出以より皆僅成減年次白拍子

事と申す舞出雲客乃中に携り礼拜人拍ふと
取て山道をふりてゆるり元希代之入物遊遊
之儀式あり後及御座去りて古座
間冥加之程意と不便之由申入之龜山院
と田舎花夜又うしすり有御座去りて王子
とくささる世移不見童いゝと云ふわらんこ被
作下識に程代之胡儀高以少少未代とと
何れ寛宥か。のり子此座と眉目よりいへ
おのれ今我貴と森と筆端より毛筆通
式公卿殿上人座と座下に相更ふは是た

一々の之に之ありは生々若固今は陽り
と思儀々々此次第能録一紙の書並々
愛阿頻致らるる方伺伏見殿中々處可然
之旨依仰被若丸の書與之兩座之筆後見
為紙和紙成面と書 大王之御書及通
親王と御文一通同授之筆秘之存未代々
能り後へとも也

文安二年法鏡下向之儀書中弛草筆

執筆
法印 公意
愚草
大僧正 實意

右文安田樂能記以奈佐勝鼻藏本書寫以能勢頼廉藏本校合畢

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

紀河原勸進核樂日記

義政 慈照院殿御時 後花園 寛正五年甲申月

多田須河原勸進申樂親世左又三郎此六歲音
河弥六十七歲

勸進聖法印普盛 九十八歲
号春松院

一公方様御車 沛周車

日野屋沛下簾掛

沛殿末頭沛路室町ヲ南北小路ヲ東京橋ヲ合
小路ヲ東末在ヲ水道祖神前ヨリ河原沛供允
兩番悉次申不同